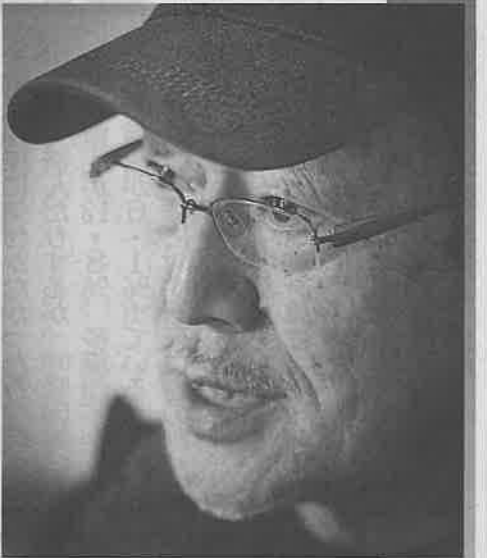


相模原殺傷事件判決

作家、詩人

辺見庸さんに聞く

相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件で、横浜地裁が、元職員植松聖被告に死刑判決を言い渡した。事件を契機に小説「月」を執筆、死刑制度に長年、強く反対してきた作家で詩人の辺見庸さんに聞いた。



辺見庸さん

隠された優生思想の表出

この事件が起きた時、中世から近代、現代に至る人類の歴史の中で、非常に大きな出来事だと直感しました。「人間は平等であり、人権は守られる」「人を差別しても、されてもいいけない」といった言わずもがなの前提が私たちの内面できつとく破壊していったことを、あらわにしたからです。



殺傷事件が起きた知的障害者施設「津久井やまゆり園」
2016年、相模原市緑区

「月」 寓意に満ちた叙事詩としても読むことができる長編小説。2018年に出版された。物語は「園」に入所する「きーちゃん」の独白を基調に進む。全く動けず、目が見えず、思うように話せないきーちゃんは、自分を「在る」ことを考え続ける。「在りつづける」ことを誰かに請われているわけでもなく、誰にも分かってもえない痛みを抱えながら「在る」ことを考え続けるきーちゃんは「だれよりもそつちよく」な職員「さとくん」に心を許している。だがさとくんはある日「敵対者」の空気をまとってやってくる。

死刑判決は被告と同じ論理に

「偽装」 意志とは関係なく「在りつづける」という実存について、私たちはとりあえず「そういうものなのだ」と引き受けるしかない。他人が「在る」「ない」を決めることはできません。けれど日本社会では長く強制不妊が行われ、今は出生前診断で「命の選別」をしている。「選別」の射程を広げれば、企業では人事評価で「良い社員」かそうでないかをより分けている。強い者と弱い者、美しい者と醜い者、「正気」な者とそうでない者……。あらゆる場所に優生思想が染みわたっている。

角川俳句・短歌賞の贈呈式

同時受賞4人に期待

俳壇、歌壇の登竜門、第65回角川俳句賞・短歌賞(角川文化振興財団主催)の贈呈式が東京で開かれた。いづれも2人同時受賞という珍しい結果に、選考委員からは「若いリーダー」として俳句を活性化してほしい」「さらに研さんを積んで良い歌を」と期待する声が続出した。



第65回角川俳句賞・短歌賞の贈呈式で壇上に並んだ受賞者。前列右から2人目が抜井諒一さん、左へ順に西村麒麟さん、田中道孝さん、鍋島恵子さん(東京都千代田区)

文化

俳句賞を受賞したのは、西村麒麟さんと抜井諒一さん。西村さんは「若いリーダー」として俳句を活性化してほしい」「さらに研さんを積んで良い歌を」と期待する声が続出した。

「俳句という切符を使って旅するうちに、さまざまに自然から感動をもらった」と語った。

短歌賞を受賞したのは、田中道孝さんと鍋島恵子さん。田中さんは「結ばれたい」と思っている」と話した。

吸するときと歌った鍋島さんは、予想外な言葉の連なりから独自の世界を紡いでいる」と評価した。

選考委員の小池光さんは「田中さんの歌について、職業はつらさを歌うのが基本トーンだったが、泣き言がなくて気持ちのいい雰囲気漂うのが新鮮だった」。

京都国際写真祭 春から秋へ延期

京都市内の町家などを舞台にした「KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭」は、新型コロナウイルスへの対応のため、開催時期を春から秋へ延期する。当初は4月18日〜5月17日の予定だったが、9月19日〜10月18日に変更する。

国内外の気鋭の写真家の作品の展示を中心としたイベントで、2013年にスタートし、今年で8回目。今回のテーマは「VISION ON(ビジョン)」で、日本人作家では福島あつし、片山真理、植田正治らの作品が展示される。サイトは <https://www.kyoto-graphie.jp/>